



## 校長室から

### 遠藤周作が平戸で見つけた「母なるもの」

校長 峰 薫

『沈黙』で有名な作家 遠藤周作さんは、何度か平戸を訪れ、隠れキリシタンの子孫たちを取材しています。『沈黙』のキリシタン迫害時代の長崎で、隠れキリシタンが唱えるオラシヨ（ポルトガル語の祈りのことば）は、生月島で聞いたものを元としています。また、キリシタン時代の町並みを残す平戸の風景を、長崎に置き換えて描いた場面があります。

遠藤さんの短編集に「母なるもの」という作品が収められています。主人公の小説家は、1960年代、フェリーボートに乗って平戸を訪れ、キリシタン時代の信仰を守り続ける集落を取材します。ぬかるみに足をとられながら山を越えて集落にたどり着き、集落の人々に警戒されながらも、なんとかオラシヨを聞かせてもらい、納戸神（納戸の奥に隠された聖母マリアとキリストの絵）を見ることができます。このオラシヨを聞き、農婦の姿で描かれた聖母マリアの絵を見たことが、自分と母親の「秘密」の告白につながるという内容です。

多くの研究者が、「母なるもの」の主人公が作家本人と重なることを指摘しています。主人公の母親は、厳格なカトリックでした。息子に対してもストイックさを求め、厳しく接しました。それに反発した中学生の主人公は、母にうそをつき、後ろめたい行動をとっていたために、母の死を看取ることができませんでした。「眉と眉との間に、苦しそうな影」を残して死んでいった母の姿だけが主人公の心に刻み付けられます。そして、その「後ろめたさ」を「秘密」として、心の奥に隠して生きていきます。

その「秘密」の告白が、多くの隠れキリシタンが処刑された岩島（中江ノ島）を見ている場面から始まります。隠れキリシタンの子孫たちの「世間には嘘をつき、本心は誰にも決して見せぬという二重の生き方」に、主人公は、母にうそをつき、看取ることができなかった後ろめたさを隠して生きる自分を重ねます。と同時に、隠れキリシタンの子孫たちが、聖母マリアを信仰の対象としていたことで、自分の母親を連想し、自分が母親の許しを望んでいたことに気づきます。そこで、「秘密＝罪」の告白へと場面は展開します。

遠藤周作さんが、書くことで救われたのかはわかりません。誰にでも秘密はあり、告白は誰もができることではないというのが現実かもしれません。

私が読んだのは20年ほど前ですが、いまだに「平戸＝母なるもの」と考えてしまうぐらい印象に残っています。そして、私は、この小説に救われました。実力試験でも作ろうかという手にした動機は不純でしたが、今は大切な作品に出会えたと思っています。

※前号の訂正 外山滋比古さんの『思考の生理学』→『思考の整理学』



## 全国高等学校野球選手権

7月8日(土)、長崎県高校野球大会1回戦が佐世保球場で行われました。3校連合チーム(平戸、佐世保商業、佐世保西)は、4校連合チーム(国見・ロ加・島原翔南・諫早商業)と対戦し、0対19(5回コールド)で敗退しました。3年の濱田友輔さんは、平戸高校野球部の唯一の部員として、1年間活動してきました。多くの職員に見守られながら最後の試合を終えた後には、「周囲の支えて活動できた」と、繰り返し感謝の言葉を述べていました。



## 職場体験

7月5日(水)~7日(金)、平戸市内の10事業所にご協力いただき、2年生の職場体験を実施しました。働くことの意義や希望する職種の専門性など、学校では得られない多くのことを学んだようです。中には、働くことの大変さを身に染みて感じた生徒もいました。全員が自らの進路を考える有意義な体験でした。

### 【生徒感想文抜粋】

「難しいこと、きついこと、従業員の人たちがこれを毎日続けているのはとてもすごいと思う」



## ス ポ G O M I

7月16日(日)、平戸市で行われたスポGOMI甲子園2023に参加しました。暑い日差しの中、参加者としてごみ拾いに精を出したり、ボランティアスタッフとして会場の警備にあたりたりと、58名の生徒が一生懸命に取り組みました。



## 8・9月の主な行事予定

8月

9日(水) 平和学習

9月

1日(金) 始業式・基礎力診断テスト

8日(金) 介護の魅力伝道師講話(1年)

16日(土) マーク模試(3年)(~17)

21日(木) ジョブガイダンス(1年)

24日(日) 全商情報処理検定

